



わたし かいせつしゃ 私がプラネタリウム解説者になったいきさつ

星を見た記憶は何歳からありますか？ 私は4歳でした。幼児にとって夜は短く、住んでいた下町の空で見る星は、ぽつりぽつり片手で数えられるくらいでした。星よりも明るい月や、ピカピカ光って通り過ぎていく飛行機を見る方が面白かったころでした。

ぐっと身近になったのは、家族で訪れた福島県でのこと。連休中に営業して



さそり座のアンタレス、金星、土星
福島県にて

いる店はほとんどなく、皆が旅行へ出かけていたため、あたりはとても暗く静かでした。足元がよく見えず何度も転びそうになりながら母と夜に散歩に行きました。公園で一休みしたとき、いつも眺めていた空の星は数えられるほどでしたが、このときは空中、頭の上いっぱい星が輝いていたのです。

月明りもなかったため、ひとつひとつがまるで生きているかのような星々の瞬きに、少し怖くなったことも覚えています。あまりの衝撃の景色に心を奪われました。

それからは、寝るまでのわずかな夜の時間を外に出て空を眺め、星を探すようになりました。神話や星座の本を買ってもらい、何度も読み返しました。いつか本の星座を自分で探してみたい、星雲や星団を見たいという思いが強くなり、小学校に入ってからプラネタリウムに通うようになりました。そのときの解説者の大先輩たちと、今では一緒にプラネタリウムや観望会などで活動することもあります。4歳のときの星空との運命の出会いから、私と星との関係が始まったのです。

2022年11月29日記 (解説員: 青木 明子)